

委員のコメント

(中井孝幸 委員)

地域の歴史や文化を記憶するためにも、図書館は必要な施設だと考えています。また、にぎわいの創出だけでなく、地域のさまざまな課題解決、市民のさまざまな活動を支える器としても、図書館は期待されています。

この1年間は、ワークショップや視察が行なわれ、基本構想を取りまとめるために、委員同士で議論を重ねてきました。今現在だけでなく、これから50年先も見越して、常滑市にあるべき図書館像について意見交換ができたと思います。一方で、建設コストの上昇に伴い、図書館整備の時期を少し遅らせる意見がでましたが、私は「鉄は熱いうちに打て」、「善は急げ」と考えています。

今まで図書館規模やサービス内容を積み上げてきましたが、図書館整備が止まってしまふことだけは、絶対に避けなければなりません。そこで、図書館整備を前に進めるためには、1) 施設規模の縮小やサービス水準の見直し、2) 将来の増築に柔軟に対応できる施設づくりの検討、3) 図書館単独ではなくホールを含めた多機能融合型の複合施設としての整備の検討など、多角的に方策を考える必要があります。

図書館は、成長する有機体と呼ばれています。一度整備したら終わりではなく、そこから成長が始まります。図書館整備の種を蒔かなければ、芽吹くこともありません。立ち止まらずに、一歩でも前へ、進んで欲しいと強く願っています。

(豊田雄二郎 委員)

常滑に新たな図書館をつくる。その第一歩を踏み出す基本構想策定委員会に加わられたことには、強い責任を感じています。記者として地方自治や地方政治を長年見てきた経験が、多少なりとも、常滑のまちづくりの一助になればと、今も考え続けています。

市民ワークショップから始まった一連の議論を通じ、私なりにたどり着いた結論は、図書館建設は決して「箱もの行政」ではない、ということです。

基本構想の「基本理念」が示す通り、図書館は「知のインフラ」であり、誰もが安心して集える「居場所」であり、子どもからお年寄りまで人を育む存在です。仲間やノウハウを見つけ、地域課題を解決する契機にもなり得ることでしょう。言うなれば、まちづくりや都市経営を支える基盤にほかならないわけです。

市の多様な施策との連携が考えられます。教育や文化、生涯学習はもちろん、福祉や地域コミュニティの維持、公園整備や公共交通、防災、脱炭素や生物多様性、サーキュラーエコノミー、DX、デジタル戦略など、これからの図書館づくりには、市のあらゆる施策と連携する視点が求められます。

市の財政状況が厳しいことは承知しています。総事業費を極力抑える工夫や知恵は不可欠でしょう。例えば、岩手県紫波町のオガールプラザのように、図書館を中核とした民間との合築や複合化によって相乗効果を生み出す手法は大いに参考になります。あくまで現時点での話ですが、私が考える現実的な案として、旧市民病院跡地に芝生広場を整備し、その中核に、まずは小規模な図書館（将来的な増築を前提とした設計で）をつ

くる手もあります。広場は市民に開放し、キッチンカーやマルシェの出店を促したり、災害に備えた避難物資の備蓄倉庫やトイレトレーラー、トレーラーハウスの基地としたり、やきもの散歩道や海沿いへの散策ルートやグリーン発着の拠点にしたり、つまり、図書館を核として新たな都市戦略を組み立てるのです。国や県の施策や補助金・交付金制度を注視し、持続可能な事業スキームを模索し続ける必要もあります。

いずれにしても、新図書館に期待する市民の機運がこれだけ高まっている中、歩みを止めてはなりません。この基本構想には、市民の「希望」を盛り込んだ理想の図書館像が描けていると信じます。官民連携や市民パワーによる新図書館づくりを通じ、この街を次の世代へと引き継いでいく。こうしたプロセスの積み重ねこそが、郷土への誇りや愛着、すなわちシビックプライドの醸成をもたらすに違いありません。新図書館の早期竣工に向け、議論がさらに加速することを切に願います。



図書館を小さく産んで大きく育てるイメージ（生成A Iで作成）

（井村美里 委員）

私は市民ワークショップで統括ファシリテーターを務めた経緯から、本委員会に参加した。ワークショップでは、参加者が互いの意見に耳を傾けながら、市の財政状況や他都市事例の視察結果など多角的な視点で議論が深められ、「こんな図書館をつくりたい」という、参加者の主体的に関わろうとする姿勢が強く印象に残っている。

一方で、公共施設を取り巻く環境は厳しく、建設費の高騰や既存施設の老朽化対応など、市財政への負担は将来にわたる課題である。今回の図書館整備についても、新築に限らず、商業施設の一部を活用することで、建設費や施設管理費を抑制しつつカフェ等

の併設機能や居心地のよい滞在環境を確保、新たな利用層を呼び込む効果を期待できると考えていた。委員会でもそうした代替案を含めた議論が行われたが、そのうえで、ワークショップから継続して示されてきた市民の思いを重く受け止め、この時期に理想の図書館像を明確に示すことが重要と判断し、基本構想を取りまとめた。

本構想は、「知りたい」「行きたい」「読みたい」「使いたい」「始めたい」という市民一人ひとりの主体的な意思を起点に、基本方針と目標を定めている。図書館を、市民の活動や挑戦を支える基盤として位置づけた点に特色がある。

まちに図書館が存在することで、暮らしの質や文化の厚みが時間をかけて育まれていく。とりわけ、図書館に主体的に関わろうとする市民の存在は大きな財産であり、その芽を大切に育てることが、将来にわたりまちの成熟を支えることにつながるだろう。

重要なのは、図書館というハコモノの整備ではなく、そこで誰が何をするのか、さらに言えば、図書館をはじめとして常滑がいかに本に親しむまちになるかという点である。

図書館の整備時期にかかわらず、運用面の充実はすぐにでも始められる。園文庫や学校での読書タイムは、幼少期から本に親しむ環境の基盤となるものであり、その充実は欠かせない。また、ワークショップでは、読み聞かせや本のボランティア、学びをつなげる講座の開催など、市民自らが図書館で活動したいという声が多く聞かれた。本の交換会や私設図書館といった市民主体の動きまでも含め、こうした動きが生まれ広がることで、図書館の内外を問わず、本に身近に触れられるまちが育っていく。そのために、参加のきっかけと継続的に関われる仕組みづくりも期待している。

図書館整備は、単なる施設整備の可否ではない。どのようなまちを目指し、何を公共の基盤として次世代に手渡すのかを問う選択である。構想に込めた想いを受け止め、十分に考え尽くしたうえで判断されることを願っている。

(山際史子 委員)

図書館基本構想策定委員会で共有された認識は、基本理念、基本方針、望ましい図書館の面積の三点であった。これらの認識の根底には「私たちには図書館が必要だ。だから新しい図書館が欲しい」という市民の強い思いがある。図書館長として、この言葉をいただけたことは大きな励みである。

しかし、新図書館建設は将来世代への負担を伴う。市有地では常滑市民病院跡地が適地と考えるものの、委員会として「どこに、どう建てるか」という最終的な判断には至らなかった。こうした状況を踏まえ、今後の検討に向けて必要な準備を進めることが求められる。そこで以下に私が望む方向性を示す。これらの取組は新図書館建設への機運を高めるとともに、ソフト面の充実を通じて、市民に誇りを持ってもらえる図書館づくりにつながる。

1 財源・体制整備

- ・新図書館整備に向け、基金の計画的かつ継続的な積立を行う体制を構築する。
- ・補助金情報等を収集する担当者と予算を確保する。

2 サービス提供の継続と拡充

- ・新館完成までの間、常滑地区・鬼崎地区の利用者が使える場所を確保する。
- ・市民の意見を聞く場を、ワークショップ等を通じて継続する。
- ・連絡便・サービスポイントを拡充する。

3 デジタル化・DXの推進

- ・DXを計画的に行い、場合によっては先行して推進する。
- ・地域資料（谷川徹三文庫等）のデジタル化を継続的に予算化する。
- ・電子書籍・デジタル資料の提供を拡充し、電子図書館サービス活用を促進する。

4 学校図書館との連携

- ・公共図書館と学校図書館のネットワークを構築する。
- ・学校司書を一人一校で配置する体制の整備を進める。

5 他施設との複合化・多機能融合型図書館の検討

- ・テナント型、コンバージョン型を含め、他施設との複合化の可能性を検討する。
- ・既存の複合モデルを参考にしつつ、常滑市に適した形を模索する。
- ・多様な利用に対応できるフレキシブルな図書館空間の整備方針を検討する。

これらの取組は、新図書館建設への機運を高めるとともに、ソフト面の充実を通じて、市民に誇りを持ってもらえる図書館づくりにつながる。旧常滑市立図書館が市民にとって先進的で誇りある存在であったように、費用面の課題はあるものの、新図書館に向けた準備を今から進めることが大切である。

最後に、自治体が内情を率直に共有してくれたことに感謝を申し上げる。市民の思いと職員の努力が塩漬けにならず、常滑市が市民のために良い判断を下すことを強く願う。

(平野小月 委員)

私は小学校の読み聞かせなどを通じて、たくさんの絵本、そして子どもたちと触れ合っています。子どもたちの成長には本が欠かせないと感じていますので、できるだけ早い時期に図書館が建設されて欲しいと思っていました。

その一方で、今回の市民ワークショップを見学したり、参加者の方の意見をお聞きして、「本当に図書館だけが必要なのか?」、多くの方にとっては、図書館もある「空間」であったり「居場所」が必要なのではないかと感じていました。

これらのことを踏まえて、可能であるならば、図書館がある複合施設の建設が望ましいと考えました。人口の推移や市の財政状況にも見合った、小さくても機能的で魅力のある『図書館のある複合施設』ができたらいいなと。

ここまで、委員としての私の意見を述べさせていただきましたが、ここからは、常滑市立図書館協議会の立場でのコメントとなります。

まずは、資料の充実や世代間交流のできる場、私立の保育園への支援など図書館協議会の中で出た意見が反映されていることをとても嬉しく思います。

協議会の中での出来事ですが、デジタル図書など長期的目線について賛同的な意見がある一方で、ICT・DXなどの言葉に対して抵抗がある声もありました。今後、DXによる利便性を図ることは当然だと考えますが、常滑市の高齢化が進んでいくことを考えると、デジタル弱者に対する配慮や、人とのふれあいといったことも必要だと考えます。また、ある程度の期限を決めて進んでいかないと、いつまで経っても図書館ができないのではないかと危惧する声もありましたので、図書館に対する市民の思いが冷めないうちに、議論が進むことを望みます。

(中井明子 委員)

常滑市の図書館基本構想策定に向け、市民の皆様がワークショップ、他自治体への視察などに熱心に参加される様子を拝見しました。また皆様の報告書は、図書館という場所の可能性について、多面的・多角的な視点を踏まえてまとめられていました。中でも強く心に残るのは「図書館は出会いの場である」という言葉です。出会う相手は、本であり、知識であり、人であり、新しい世界であるということです。書店や図書館の大きな本棚の間を歩く中で、予期せぬ一冊に巡り合う「偶然の出会い」は知的好奇心を思わぬ方向へ広げ、学びの幅を豊かにしてくれる、そんな体験が私自身にもあります。

現在、子どもたちを取り巻く環境は激変しており、中高生の不読率の上昇や、SNS等の普及による読書習慣の変化が顕著です。本や図書館を「あまり必要としない」というような考えも中にはあるのかもしれませんが、しかし、こうした時代であるからこそ、子どもたちが豊かな感性を育み、自ら未来を切り拓く力を養うための「出会いの場」として図書館の役割が期待されます。

第一に、学校図書館との連携です。学校図書館は「タブレット端末導入による利用減」や「最新資料の不足」といった課題に直面しています。市立図書館が学校との連携・支援を充実させ、「読書センター」としての機能が十分に果たされることが重要です。授業と連動した「本を通じた学び」を豊かにすることや学校図書館の運営支援など、子どもたちが新たな知識や多様な価値観と出会う機会を広げていけるような連携体制の構築が望まれます。現在、市内すべての小中学校が「コミュニティスクール」として地域と協働した活動の充実を図っていますが、市立図書館との協働で可能性が広がると期待されます。

第二に、安心できる「居場所」としての機能です。さまざまな背景をもつ子どもたちの居場所づくりは大きな課題の一つです。図書館は「全てのこども・若者が安心して過ごせる第3の居場所」であることが求められています。中学生アンケートでも自宅以外での勉強・活動場所としての図書館を望む声が多く見られました。「子どもたちが安心して過ごせる居場所」、「子どもを緩やかに見守る世代が集う場所」として、多世代が日常的に集い、新たな触れ合いやつながりを生み出すきっかけとなる空間を目指していく常滑市の図書館基本構想にぜひ大切な視点としていただけると幸いです。

地域の宝である子どもたちそれぞれが、図書館を通じて出会ったものからつながりが生まれ、その体験を繰り返しながら、大人になっても学びの主体として成長していく、そんな姿を想像します。それぞれのウェルビーイングの中に、この図書館基本構想の理念である「出会いの循環」が息づいていくことを願っています。

(赤尾恵子 委員)

今回、常滑市立図書館のあり方に携わることになり、改めて常滑市の財政状況をより深く知る事になりました。図書館建設費の負担は重く、痛みを感じています。

図書館建設費に限らず、次世代、この先の未来の子供たちに手に負えない負債を残したくありません。それは常々思っています。

図書館市民ワークショップに参加させて頂き、小牧、江南、遠く千葉の富津市の図書館で見学をさせて頂き、各地で図書館に関わる人達の熱い思いに触れさせて頂きました。また毎月の図書館市民ワークショップでは幅広い年代の多くの方々から図書館への熱い希望、アイデアなどに触れることが出来ました。図書館へ自分の子供時代の情緒的な思い出を求める人、不登校の子供の居場所の一つであってほしいと望む方の思いが特に印象に残っています。

基本構想策定委員会では、図書館が同じ趣味や思いを持つ市民が集える場所、起業を考えた時や地域課題解決を考えた時に行動を起こす場所としての利用場所との考えを聞き、図書館とは単に本の貸し出し場所でなく、他の可能性を秘めた場所なのだと感じました。

図書館とは、汎用性があり、必要な人に必要な利用が出来る、器の大きな施設であるべきなのだと感じました。これからの市民の未来を創っていく拠点となりえる場所なのだと。

やはり、常滑市に図書館は必要です。私達には知的インフラの土台があり、何かを創る場所があり、自分の居場所がある、と思える場所が必要です。

しかし、財政状況や先が見づらい今の時代を思うと、答えが出ません。

これが現在の私の正直な答えです。

(久田博司 委員)

1 財政状況を踏まえた基本認識

常滑市の財政状況や将来的な人口減少、社会保障費の増加見込みなどを踏まえると、新たな公共施設整備について慎重な判断が求められることは十分理解している。

30年間で約182億円という図書館事業費は決して小さな金額ではなく、財政面から懸念が示されることも当然である。

しかしながら、財政状況が厳しい時代であるからこそ、将来世代に必要な社会基盤への投資を止めるべきではないと考える。

2 図書館が果たす役割

図書館は単なる本の貸出施設ではなく、子どもの読書習慣や学力の基盤を支える教育インフラであり、市民の学び直しや交流を支える「知の拠点」でもある。

人口減少社会において地域の将来を左右するのは「人材」であり、その人的資本を育てる環境を整えることは自治体にとって不可欠な役割である。

また、常滑市は中部国際空港を擁する地域として国内外から人が訪れる都市であり、その都市機能にふさわしい学びと交流の拠点を整備することは、地域の魅力や持続性を高める観点からも意義のある取組である。

3 財政規律と整備手法の検討

一方で、財政規律を無視した整備は許されない。人口減少を前提とした適正規模の再検証や機能の精査を行うとともに、文化会館や公民館など既存公共施設との複合化の可能性も含め、建設費や維持管理費を抑制できる整備手法を検討する必要がある。

また、利用率目標や市民一人当たりの投資額、30年間の総保有コストなどを示し、市民や議会に対して費用対効果を説明できる構想とすることが求められる。

確かに、30年間で約182億円という事業費は一見すると大きいですが、長期的な公共投資として見れば年間約6億円程度の規模となる。教育・文化基盤として将来世代にわたり利用される社会資本であることを踏まえれば、その意義や必要性について中長期的な視点から検討することも必要である。

また、図書館整備を行わない場合にも、既存施設の老朽化対応や学習・交流機能不足への対応、子どもの読書環境の整備など、別の形で行政コストや機会損失が生じる可能性がある。整備の是非を判断するにあたっては、「整備する場合の費用」だけでなく、「整備しない場合の代替コストや地域の学習環境への影響」も含めて総合的に検討することが望ましいと考える。

4 今後の検討の進め方

市民ワークショップが開催され、多くの市民が議論に参加してきた経緯を踏まえれば、ここで計画を止めるのではなく、規模や手法、財源を見直しながら現実的な整備案を検討し、議論を前に進めていくことが求められる。

また、長期間にわたり検討のみが継続するのではなく、一定の方向性を定めた上で比較的短期間のうちに整備手法や規模を整理し、具体的判断につなげていくことが必要である。

図書館整備については財政的な制約を踏まえつつも、財政を理由に検討そのものを止めるのではなく、規模の見直しや複合化、補助金活用など市の負担を最小化する整備手法を比較検討し、「どの条件であれば実現可能か」を明らかにしたうえで、現実的な整備の方向性を示していくことが、今後の検討において不可欠であると考えられる。

(土方宗広 副委員長)

委員として、私が抱く理想の図書館像と厳しい財政状況下における現実的な着地点に

ついでに、この冊子にまとめられた皆様の意見が、これからの常滑の図書館整備、常滑の教育、歴史、文化、芸術などの確かな礎となることを願います。

私たちの委員の新しい図書館に対する思いの根底には「人と人との温かいつながり」があったと思います。図書館という場所が単なる「本の貯蔵庫」ではなく、穏やかな笑顔と優しい言葉が交わされ、誰もが安心できる居心地のいい「市民の心の拠り所」であるべきだという共通の願いがあったように思います。しかし、理想を語る一方で、常滑市の厳しい財政状況という現実に向き合わなければなりませんでした。

私の理想の図書館像は「市民一人一人の可能性を拓き、地域の誇りを編み直す場所」です。

第一に、子どもたちが夢を見つけ、自ら学ぶ力を育む「教育の拠点」であることです。GIGAスクール構想によって子どもたちの手元には端末が届きましたが、情報があふれる現代だからこそ、体系化された「知識」と心に深く突き刺さる「本物の一冊」に出会う場所として、図書館の価値は今後さらに高まると信じています。

第二に、常滑のアイデンティティを「次世代に繋ぐ拠点」であることです。常滑焼の歴史、力強い山車文化、そしてこの街を愛する人々の記憶。これらをデジタルとアナログの両面で大切に保管し、市民がいつでもわが街のルーツに触れ、新たな文化を創造できる場所であってほしいのです。

しかし、現状に目を向ければ、大規模な新築や維持費のかさむ贅沢な設備を追求し続けることは困難です。そのような状況の中で、私たちが目指すべき着地点は「形あるものの贅沢さ」ではなく、「持続可能な質と目に見えない豊かさ」ではないでしょうか。

そして財政的な制約を乗り越えるための鍵は「つなぐ」と「ひらく」という二つの戦略だと考えます。

一つは、既存の社会資源との「接続（つなぐ）」です。すべての機能を図書館単体で完備しようとするのではなく、民間施設や公共施設との複合的な活用を検討すべきです。例えば、ICTを活用した効率的な予約受け取りシステムの推進や利用者に対するサービスの拡充を追求することがコスト削減につながり、利便性を高める現実的な解のような気がします。

もう一つは、市民の力への「開放」です。予算が限られているからこそ、市民の皆様のご知恵やボランティアの力、そして多世代が交流する共創の仕組みが必要ではないでしょうか。「管理される施設」から「市民とともに運営し育てる施設」へ進化してほしいと思っています。

基本構想で掲げた理念は、私たちの進むべき道を指し示す「羅針盤」です。財政が苦しいからといって、理想の旗を下ろす必要はありません。むしろ、制約があるからこそ、「本当に守るべき価値は何か」を考えることができました。私が望むのは、図書館が整備された後、市民の手によって日々進化し、温かさを増していく図書館です。たとえ最初の一步が小さくとも、子どもたちの瑞々しい感性と、市民同士の穏やかな交流が満ちる場所であれば、それは間違いなく「理想の図書館」なのです。

最後に、この冊子にまとめられた皆様の意見が、これからの常滑の図書館整備、常滑の教育、歴史、文化、芸術などの確かな礎となることを願います。

(山田朝夫 委員長)

【委員長の苦悩】

本委員会の委員長の任務は、困難を極めた。「委員長」の立場としては理想の図書館を追求し、それを早期に実現したい。ただし、各委員が抱く「理想」は一様ではない。一方「副市長」の立場としては、委員会の提案を市民や市議会の概ねの賛同を得られるものとしたい。さらに、それが市財政の持続可能性を損ねるものであってはならない。そのような状況の中で「基本構想」をまとめなければならない。以下、基本構想には盛り込まれなかった山田個人の私見と私案を述べてみたい。

【図書館利用率の低さ】

異論はあるかもしれないが、私は「常滑市民の図書館利用率は低い(市民の1割程度)」と認識している。その理由として、次の3点が考えられる。

- ①旧中央図書館及び既存図書館が時代の要請に応えておらず、魅力が低い。その主な原因は、⑦図書資料の質及び量の不足、④図書館の空間的魅力の不足の二つである。
- ②読書習慣を有する市民が少ない。これは、元来、窯業・農業・漁業を基幹産業とする「ものづくりのまち」常滑の風土が関係しているのではなかろうか。
- ③読書以外の楽しみ(釣り、ゴルフ、家庭菜園等の趣味など)を持つ退職高齢者が多い。これは非常に歓迎すべきことであるが、都市部に比べて、無料で時間がつぶせる公立図書館への需要は低い。

(②、③は根拠データのない全くの私見である。)

【市民アンケートの結果】

- ・早期に新図書館を求める声が多い。
- ・青海地区住民、南陵地区住民の図書館に関する不満は少ない。「図書館を求める声」は「常滑・鬼崎地区に図書館が欲しいとの声」と考えられる。
- ・新図書館の規模に関しては、「旧中央図書館と同程度」との声が多数である。
- ・「新図書館は不要」、「他の行政サービスに金を使うべき」との意見もある。

【市民ワークショップ】

- ・市民ワークショップでは、人口同規模の江南市立図書館程度以上の規模・機能を望む声が多かったが、テナント入居による早期整備を望む声も一定程度あった。
- ・求められる機能の優先順位としては、①図書資料の充実、②快適な読書空間、③ICT技術の導入、④図書サービスの充実、の順であった。

【本委員会での議論と私見】

- ・せっかく整備するなら、第5回策定委員会(12月9日)の<参考資料1>に記載された機能や施設規模を備えた「本館」(以下「理想の図書館本館」という。)が望ましいとの意見はもったもである。
- ・しかし、現時点で、この意見が広く市民、市議会の賛同を得ることは難しい。図書館

を利用したことがない人には、その良さや必要性が理解できないのではないだろうか。

- ・一方で、まずはテナント入居で鬼崎・常滑地区の図書館空白状況の解消を行うべきとの意見もあった。
- ・現時点で、青海公民館と南陵公民館内の図書館機能を廃止することは難しい。理想の図書館本館の整備後に、青海と南陵の図書館機能を旧中央図書館閉館以前より縮小することについても、かなりの抵抗が予想される。

【私案】

- ・そこで、理想の図書館本館を整備するまでの暫定措置として、鬼崎・常滑地区の図書館として「イオンモール常滑への入居による整備」を提案したい。
- ・賛同を得ないままに、理想の図書館本館整備へと突き進むと、他自治体で見られるような政治問題化を招く恐れがある。
- ・もちろん、イオンモールとの入居交渉が成立することが前提であり、早急に交渉を進める必要がある。

【イオンモール内での整備の基本的考え方】

- ・限られた財源を、市民ワークショップで求められる機能の優先順位に従い、①図書資料の充実を最優先、次いで②読書空間（室内）の魅力向上に集中投下する。
- ・床面積は、少なくとも 1,000 m²は確保したい。（書庫は設けない。）
- ・青海本館、南陵分館は旧中央図書館廃止前の規模に戻し、こども図書館はイオンモール内に統合する。青海の書庫は引き続き使用する。

【イオンモール入居のメリット】

①相乗効果による新しい利用者ニーズへの対応

- ・市民ワークショップでは「居場所としての図書館」という要望が強かった。
- ・図書館を「居場所」として長時間に滞在する利用者にとっては、カフェやレストラン・フードコート、書店、スーパーマーケット、イオンホール、その他イオン内の施設・機能が大いに有用である。
- ・現代の図書館には、「旧来の図書館基本機能（閲覧、貸出、レファレンスなど）」を超える機能（快適な居場所、憩い、交流、課題解決など）が求められている。そして、その多くはイオンなどの大型店舗も同様に求められている。両者の「空気感」が同じであるため、高い相乗効果が期待できる。

②広大な駐車場

- ・すでに整備されている広大な平面駐車場は魅力的である。

③新たな利用者の獲得

- ・イオンに入居することで、図書館利用以外の目的で訪れた市民の「立ち寄り利用」が促される。一度立ち寄った市民に図書館の魅力を伝えることで、リピーターを増やす。これが新規利用者・図書館利用率の増加につながることを期待される。
- ・開館から4年が経過したこども図書室の利用者数の伸び悩みから推測すると、現時点

で利用可能な市有地等（例：旧市民病院跡地）に単独で旧中央図書館と同規模の図書館を新築しても、新規利用者の掘り起こしには繋がりにくい。

- ・理想の図書館本館の整備について、図書館整備への財源投入に消極的な市民・議会からの合意・納得を得るためにも、図書館利用率を可能な限り引き上げたい。

④運営経費の節減

- ・もう一つのイオン入居のメリットとして、初期費用（土地、建物、トイレ、駐車場など）の縮減に加えて、運営費用（施設管理費、施設修繕費、カフェ、ホール機能、指定管理費用など）の節減があげられる。
- ・節減された経費の一部を、図書資料の充実、ICT化、その他図書サービスの充実に振り向けられる。「図書館」の本質は、「機能」であって「建物」ではない。

【イオン入居のリスク？】

- ・デメリットとして指摘される「イオン撤退のリスク」は、逆に「こちらも契約期間終了後は退去できる」というメリットととらえることもできる。（イオンの契約期間単位は6年。次回契約更新は2028（令和10）年4月。）

【文化会館・中央公民館の老朽化問題】

- ・昨年（2025（令和7）年）末、文化会館の非常用発電施設の機能不全等の予期せぬ事態が発覚し、現在、2026（令和8）年10月以降の文化ホールの利用予約を停止している状態である。2026（令和8）年度当初予算案では、文化会館・中央公民館改修の現況調査と改修費用の見積のための委託費が計上されている。その結果を踏まえる必要があるが、文化会館・中央公民館をどうするか、早急に結論を出さねばならない状況になってきている。

【国等の交付金の活用等】

- ・単独で図書館を新築する場合、国の交付金等の活用が見込めない。（「社会資本整備総合交付金」の活用は理由付けが難しい。）
- ・施設整備の財源を考えると、文化会館、中央公民館との複合化により、「公共施設等適正管理推進事業債」を利用したい。（現時点では、2027（令和9）年度以降、制度が継続されるかは未定だが、おそらく継続されるであろう。）
- ・ただし、複合化については、利用者団体との調整に多くの時間を要する。また、整備費用が巨額になるので、現時点では、特に議会の賛同を得られにくい。
- ・そこで、2026（令和8）年度から、「文化施設整備基金」を設立し、ポートルースからの繰入金を利用して積み立てを行いたい。ある程度の積み立てができれば、施設整備への賛同が得られやすい環境が生まれると考えられる。

【理想の図書館の整備】

- ・理想の図書館本館は、中央公民館・文化ホールとの複合化により、市庁舎に隣接し、現在株式会社ベイシアに定期借地権設定により貸し付けている敷地に、契約満了・建物撤去後（2033（令和15）年度末以降）に、整備するのが望ましい。

(理由)

- ①南海トラフ地震による津波・液状化被害の心配がない。
- ②市庁舎と新複合化施設に整備される機能との連携により建設費・維持管理費の縮減が図られる。
- ③図書館と中央公民館の機能は親和性が高い。
- ④市庁舎は公共交通「グリーン」の拠点になっており、また、2027（令和9）年から導入予定の「呼べるバス」の乗降スポットにも予定されているため、市内各地域からの公共交通アクセスも確保されている。
- ⑤市役所との駐車場の相互利用が可能である。（文化会館の駐車場不足問題が解決する。）
- ⑥理想の図書館に求められる「課題解決機能」には図書館と行政との連携が欠かせないが、そのためには、両者は距離的に近いことが望ましい。
- ⑦「公共施設の機能集約」という理由付けをすれば、「社会資本整備総合交付金」の利用の可能性が出てくる。この交付金が利用できれば、議会の同意の獲得に大きな助けとなる。

※なお、この場合、ベイシア常滑インター店が地域において重要な商業機能を果たしていることと多くの利用者が存在することに鑑み、市として、株式会社ベイシアが現在地周辺に代替地を確保できるよう配慮するのは当然である。

【終わりに】

以上が、常滑市の図書館に関する私見、及び市財政の持続可能性に配慮しつつ、市民の間に芽生えた新図書館建設の機運を消すことなく、理想の図書館本館建設へ至るための私案である。

旧中央図書館の廃止が公表された際、利用者や市民から反対の声が全く上がらなかったことに、私は「常滑市民は図書館を欲していないのだ」と感じ、大変落胆したのを思い出す。また、学校現場も多忙で、学校図書館の充実どころではないのが現状である。

近年、AIの進化は著しく、私たちの仕事、生活、教育に大きな変化を及ぼしつつある。「大半のホワイトカラーはAIに取って代わられる」などと予言する識者もいる。このような時代の流れの中で、人間はどうすべきか？

私はAIと付き合いの中で二つのことに気づいた。一つは「彼らは『ことば』で考えている。」ということ。二つ目は、「AIは既に平均的な人間を超える『問いに答える』能力を有しているが、『問いを立てる』能力を持たない」ということだ。

AIは文章を作るのが得意だ。動画も作る。絵もかなり上手く描けるようになっている。そして、どうも「ことば」を「絵」にする方が「図」を「絵」にするより得意のようだ。だから、AIに人間がイメージしたような「答え」を描かせるには、そのイメージを正確に「ことば」で表現してAIに伝える能力が求められる。

「正しく問いを立てる」ことでAIをよりよく使うことができる。そしてこの能力は、人間のことばによる「表現力」にかかっている。「言語表現力」を育むには、幼い頃からの読書習慣を身につけることが必要だ。教育も、従来の「問いに答える能力を育む教育」から「問いを立てる能力を育む教育」に変わらねばならない。

常滑市の理想の図書館本館が、A I を使いこなす常滑市民の「知をひらき、人を育み、地域をつなぐ」インフラストラクチャーとして整備され、多くの市民に愛され、支えられ続けることを、私は強く望んでいる。